

心理面接における「つまずき」のプロセスに関する一考察

— 中堅カウンセラーを対象としたパイロット・スタディ —

○松川春樹・池田忠義（東北大学学生相談・特別支援センター）

キーワード：つまずき, 心理面接, プロセス

目 的

近年、心理臨床の研究において「失敗」が取り上げられるようになってきている（遠藤ら, 2010）。この「失敗」とは結果であり、多くは後になってカウンセラーが気づいて反省し、その後の面接で同じ「失敗」をしないよう技術の向上へと還元される。しかし、現在進行形の面接の中で、「失敗」に至らないようにするための視点はほとんど扱われて来なかった。

これに対し、我々は「クライアント - カウンセラー関係の中で、カウンセラーが感じる面接過程の停滞・途絶」として捉えられる「つまずき」について研究を行ってきた。松川ら（2017）では、初心者カウンセラーが体験する「つまずき」の内容について、刊行されている中断事例を対象に質的に分析を行った。その結果、適切な対処が為されないと、カウンセラーの自覚、クライアントの言動、クライアント - カウンセラーの関係性、面接の枠組みの順に、面接により大きな影響を与える「つまずき」に進展していくことが示唆された。これに対して本研究では、「つまずき」の内容と共に、その前後のプロセスを明らかにすることを目的とする。

方 法

調査期間 2018年1～3月

調査協力者 学生相談に携わる中堅カウンセラー3名

手続き これまでに経験した「つまずき」やそれへの対応について、半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。

分析方法 インタビューを逐語録にし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）（木下, 2003）に準じて、「つまずき」のプロセスに関連する概念を抽出し、概念間の関連を考慮してカテゴリーにまとめた。第一筆者が一通り分析を行った後、第二筆者がチェックし、疑問があった箇所については合議により最終決定とした。

倫理的配慮 事前に本研究の内容および個人情報の保護等に関して書面と共に調査協力者に伝え、協力承諾書に署名を得てからインタビューを開始した。本研究は筆者らの所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業等はなかった。

結 果

インタビューで語られた「つまずき」を含む11事例に対して質的分析を行った結果、5個のカテゴリー、17個のサブカテゴリー、32個の概念を得た（下表）。カテゴリー間の時間経過としては《現実面での制約》《「つまずき」の内容》《「つまずき」への気づき》《「つまずき」への対処》《「つまずき」からの展開》の順に生じると考えられた。また、《「つまずき」の内容》のサブカテゴリー間では、＜カウンセラーの自覚＞

＜クライアントの行動＞＜クライアント - カウンセラーの関係性＞＜面接の目的や進め方＞＜面接のキャンセルや中断＞の順で生じることが想定された。

表 「つまずき」のプロセスに関するカテゴリーとサブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
現実面での制約	クライアントの在学年限 カウンセラーの異動
「つまずき」の内容	カウンセラーの自覚 クライアントの行動 クライアント - カウンセラーの関係性 面接の目的や進め方 面接のキャンセルや中断
「つまずき」への気づき	クライアントの言動からのずれの認識 SVを通したずれの理解
「つまずき」への対処	ずれの共有と調整 原点や停滞した地点への立ち返り クライアントの感情的反応に対する鎮静 カウンセラーの現実的判断に基づく対応 カウンセラーの葛藤の保持 中断後のカウンセラーからのコンタクト
「つまずき」からの展開	面接で扱うテーマの深化 関係性やクライアントの内省の進展

考 察

本研究では、松川ら（2017）に近似した《「つまずき」の内容》を得たほか、その前後の一連のプロセスを抽出することができた。カウンセラーの認識としては、《「つまずき」への気づき》から《「つまずき」の内容》《現実面での制約》について振り返った後、《「つまずき」への対処》と《「つまずき」からの展開》が続くと考えられる。《「つまずき」への対処》に関しては、特に＜ずれの共有と調整＞や＜停滞した地点への立ち返り＞を行うことによって、《「つまずき」からの展開》につながることを示された。つまり、カウンセラーが《「つまずき」の内容》を把握していることが、その後の面接の展開をより良いものにしていくと考えられる。

初心者カウンセラーを対象とした松川ら（2017）と比較すると、本研究では《「つまずき」の内容》において＜面接の目的や進め方＞のサブカテゴリーが得られた点が大きく異なっていた。つまり、中堅カウンセラーの方が「つまずき」を多角的に捉え、早期に自覚することができると推察される。

ただし、本研究はパイロット・スタディであり、今後、調査対象やその臨床領域を広げ、知見を深めていく必要がある。

(MATSUKAWA Haruki, IKEDA Tadayoshi)